

カルテット1

渡谷テッド・エンド

タケル

闇の中に身をおくと落ちつく、という人間は多い。闇は姿を隠し、危険な敵から身を守るからだ。遠い昔、まだ人間が地球上で最強の捕食者たりえなかつた時代、今よりは毛むくじゃらで、頑丈な肉体をもっていたとしても、それよりはるかに強い牙きばや爪をもつ外敵から生きのびるには闇を味方にする必要があつた。

同時に、闇には静けさがある。静けさは敵の不在の証明でもある。だからなおさら、闇に身をおくとき、人は心に安らぎを覚えるというのだ。

だがタケルはちがつた。闇に身をおくとき、怒りがふくれあがるのを感じる。八年前のあの晩、突如として体の中に生まれ、生長をつづけてきた獣が巨大化するのを実感する。

獣は血を求めている。痛みを願っている。苦痛に飢えている。

その理由ははっきりしている。八年前のあの晩、家が闇に閉ざされていたからだ。

塾から帰ってきた、午後六時三十分。本当なら、暖かな光が満ち、夕食のおいしそうな匂いがドアを開けたとたんに鼻にとびこんでくる筈だった。

だが鍵のかかつていないドアを開け、まっ暗な家の中に足を踏み入れたとき、タケルの鼻孔にさしこんできたのは、まったく別の匂いだった。

鉄錆の匂いと糞便の混じった悪臭。手さぐりで玄関の明りのスイッチを入れた瞬間、世界はまっ赤に染まった。

その年の春、一家は郊外の小さな一戸建てに越したばかりだった。玄関を入ってすぐの位置に階段があり、タケルと妹のミツキの部屋のある二階へと通じている。狭くて少し急な階段はすべりやすく、引越してすぐの頃、タケルは何度か尻もちをついたあげく転げ落ちそうになったものだった。

——嫌いだよ、この階段

そのたびに文句をいい、母は、

——あなたがあわてものだからでしょ。いつも寝坊するからよ。十分早起きすればいいのだから

とりあつてくれず、生意気な口をきくようになったひとつ下のミツキまでもが、

——そうだよ。お兄ちゃんがドジなだけ

母の味方をした。

その階段に赤い川が流れていた。中腹に、頭を下にした姿で、仰向けのミツキが横たわっている。目をみひらき、口を大きく開けて。

「お母さん！」

とつさにタケルの口を突いたのはその言葉だった。だが玄関以外はまだ闇に閉ざされた家の中で、タケルの叫びに応える者はいなかった。

靴を脱ぎすて、家にあがった。ひどく不安だった。何かがちがう。まちがった場所にきているような気がした。それもすぐにでもでいかなければならぬくらい、ひどくまちがった場所にきてしまったのではないか。

それでも毎日の習慣がタケルをリビングに向かわせた。あがって右手にあるリビング。ソファがあり、テレビがおかれ、夕食のあとは家族でサッカーや野球を見ていた部屋。タケルにとっては、家庭そのものだった部屋。

壁を掌がすべり、スイッチを探りあてる。シャンデリアが点つた瞬間、タケルは大声をあげた。

父と母がいた。これまで見たどんな映画よりもいっばい血を流した姿で。喉を裂かれた父は、半分首がもげかけ、腹を切り裂かれた母は、どんよりとした瞳でエプロンの上に広

がった内臓を見おろしている。

まちがつてる、まちがつてる、まちがつてる！

タケルは大声をあげながらくると向きをかえ、裸足で玄関をとびだした。外にでてみると、そこには見慣れた風景があり、ふりかえればあるのはタケルの家だった。

でもタケルが帰りは帰らなかったのはそこではなかった。タケルが帰りは帰らなかったのは、口うるさいけど優しい母と、言葉少なだが受けたとき掌が痺れるような速い球をキャッチボールで投げしてくれる父と、生意気だけどいつだってタケルのあとをくつついてきたがる妹が待っている家だった。

なのにこの家からはそれが消えていた。あるのは闇と死んでしまった家族の姿だけ。

あの夜、今もわかっている誰かが、タケルから、タケルの世界の中心を奪いとり、かわりに“死”を残していったのだ。

死がどれほど残酷に人を変貌させるかを、一夜のうちにタケルは学びとった。すべてが消え、悲しみを通りこした絶望を押しつけられ、タケルとタケルの世界は壊れた。

やがてタケルが自分だけが生きていることを、そして自分だけはこれからも生きていかなければならないことを自覚したとき、砕け散っていたタケルの心は、元の姿とはまるで

ちがう形で再構成された。

破片をかき集め、接着剤のようにいびつな形でくつつけたのは怒りだった。怒りは獣を生んだ。

誰も俺を責めることはできない。

タケルは鏡を見るたびにつぶやく。この心のまま生きていけ、とタケルは残った世界から求められたのだ。

ならば生きてやる。そのかわり、この獣がすることに、誰にも文句はいわせない。

タケルが今いるのは、古くなり解体が決定したビルの一室だった。ところどころ破れたガラス窓の向こうには、建物全体をおおうネットごしに渋谷の街が広がっている。ネットのせいで街の輪郭はぼやけ、まるで雨に煙っているかのようだ。

繁華街からは離れている。少し戻ればラブホテル街があり、その向こうが渋谷だ。

渋谷で遊んだことなど一度もない。たまるのも、集団で騒ぐのも、大嫌いだ。自分と同世代の連中が、用はなくとも渋谷にでかけるのは知っている。そいつらは、渋谷にくれば何か楽しいことがあるのだろう。だがタケルにとっては、渋谷は他の盛り場と同じで、獲物を見つける場所にすぎない。

タケルはむきだしのコンクリートの壁に背中をもたせかけ、リノリウムのはがれた床に尻をおとして、ぼんやりと外を眺めていた。

もうあと十五分もすれば獲物がやつてくる。かたわらにはスケボーがあった。タケルの移動の手段であり、カモフラージュの道具でもある。

デニムパンツの上から膝と肘にプロテクター、手には鉞のはまった革のグローブ。プラスチックのヘルメットは、防具であると同時に、ゴーグルとともに顔を隠す。

闇の中でうずくまる獣。血管の中を怒りがゆつくりと伝わって、体の隅々までいきわたるのを感じている。

放心したように動かなくても、この闇に閉ざされた建物に獲物が足を踏みいれる気配を聞き逃すまいと、耳に全神経を集中させていた。

きた。

ひそやかな話し声とコンクリートのかげらを踏む音が響いた。

タケルはすつと立ちあがった。たてかけておいたスケボーを静かに床におろす。この部屋で待つことにしたのは、獲物が集まる一画まで、直線で滑らかな廊下がつづいているからだ。それでいて、獲物からは死角になる位置だ。

「早く、早く、早く」

待ちきれないような声がする。

「あせんなよ」

余裕をかました声が応える。

「逃げやしねえからよ。それより金曜のイベントはマジだろうな」

「マジ、マジ。すっげえ集まるらしいぜ。何せ、リンのイベントだからよ」

「何だよ、リンの仕切りかよ。じゃ、駄目じゃん」

動きたそうとしたタケルは体を止めた。新たな獲物の情報が入るかもしれない。

「でも千人単位だつて話だぜ。絶対足んなくなるからよ、売れるつて」

「馬鹿。リンのここにはセキュリティがいるんだよ。よそのプッシャーが入ってるのわかったら、膝を砕かれちまう」

タケルの体がゆらりと揺れた。ソールにスチールの入ったエンジニアブーツの片方をスケボーの上にかけて、もう片方の爪先で床を蹴った。

シャーッとという音に会話が止んだ。タケルは身をかがめ、さらに床を蹴る。

二〇メートルほど先に獲物がいた。先月から目をつけていた、ドラッグのプッシャーだ。花輪組の盃をもらっていると凄んでいるのを聞いたことがある。いっしょにいるのは、クラブで女をたらしこんでは、地方の風俗に売りどばしているスカウトだ。

二人はタケルになかば背を向ける形でかがみこんでいた。足もとにはプッシャーのトラックがあつて、開いた中にごっそりとドラッグが詰まっているのが見えた。エルにエスに、MDMAだ。スカウトは、プッシャーも兼ねていて、たらしこんだ女にクスリを教え、売りつける。二人ともこのごみ溜めのような世界に棲息している、何千匹というゴキブリの仲間だった。ゴキブリは、タケルの生まれる前からこの世にいて、きつと死んだあともいなくならない。

タケルはただ、生きる限り、一匹でも多くのゴキブリを叩き潰す。生きていけといわれた以上、ゴキブリ潰しが、自分の存在理由だ。

「何だ、おいつ」

ふりかえったプッシャーが目をむく。金髪で若作りをしているが、年はタケルの倍近いだろう。黒のスーツに赤いシャツを着け、胸もとを大きく開けている。

スカウトは逆に二十そこそこで、タケルとあまり年が合わないように見えた。本当のところは、タケルよりもさらに年下の十七歳だ。タレント事務所にいたのが素行不良で追いだされたという噂だった。もともとのやさ顔を整形し、まるで女のように美形だ。街を歩けば、その美貌が女たちを惹きつけるのを計算している。十七の若さで、すでに二十人近い女を売りとばし、うち三人がクスリと性病で廃人同様になっていた。一八〇センチの

タケルと同じくらいの背で、ほっそりとした体に、革のスーツを着けている。

タケルは無言で滑っていった。まずはプッシャーからだ。

「手前、何だ!？」

加速したスケボーをスカウトめがけて蹴りとばし、タケルはプッシャーに襲いかかった。スケボーは狙い通り、スカウトの下腹部につき刺さり、甲高い悲鳴をあげさせた。これですぐには逃げだせない。

勢いのついた飛び蹴りだった。プッシャーの顔面にブーツの底が命中し、白いものが飛び散った。プッシャーの歯だ。衝撃でプッシャーは頭を壁に打ちつけ、そのまま崩れ落ちた。

着地したタケルは、地面に右膝をついたまま、今度は左足でスカウトの足を払った。腹をおさえていたスカウトがぶざまに宙を泳いだ。長髪が舞う。長い両手両足を広げ、仰向けにスカウトはぶつ倒れた。

プッシャーに向きなおった。顔面を血に染めて、プッシャーは起きあがったところだった。右手がジャケットにさしこまれ、ジャックナイフを引き抜いた。チツという音をたてて、二〇センチほどのブレードが起きあがる。ネットごしにさしこむネオンの光を、そのブレードが鈍く反射した。

「ころす……」

血の泡を吹きながらプッシャーはいった。ナイフを扱い慣れていた。爪先に体重をかけ、空いた左手をつきだし、ナイフを握った右手を逆に引いている。

素人はナイフをもった手を前につきだす。威嚇にはなるが、のびた腕を攻撃されたらそれまでだ。

ナイフの刃先は上を向いている。突くと見せかけて、斬ってくる気だ。

「シュッ」

プッシャーが血の混じった唾を飛ばしながら叫び、右手を閉めさせた。案の定、つきだされたナイフは不意に向きをかえ、タケルの右半身を狙ってくる。

タケルは体を左に流し、その場で半回転した。左腕を胸の前でたみ、肘を思いきり遠くへつきだす。半歩、プッシャーが踏みこんだのがきいて、タケルの左肘はプッシャーのうなじに叩きこまれた。

プッシャーの体が泳いだ。ナイフを握った右手の手首をタケルはつかんだ。そのまま、プッシャーの泳いだ方向にひっぱってやる。足がついてこられず、プッシャーはうつぶせに倒れこんだ。胸を打ち、うつと息を詰まらせる。その背を踏み、タケルはジャンプした。

ナイフをもった右手が着地地点だ。中途半端に握った拳をブーツが踏みつけ、骨の砕ける

ゴリツという感触がタケルの足の裏に伝わった。

プッシャーが言葉にならない悲鳴をあげた。タケルは容赦なくそのコメカミにブーツを叩きこむ。ぐいと首がねじれ、プッシャーは白眼をむいた。死にはしない。だが頸椎への損傷は、この男の残りの一生を車椅子に縛りつけるかもしれない。それがどうしたというのだ。

悲鳴がやむと、すすり泣きが聞こえた。スカウトだった。ほこりまみれになって泣いている。

タケルはスカウトに向きなおった。スカウトはさつと手をかかげ、顔をかばった。

「やめて、殴らないで。お願い、顔はやめて下さい。クスリはもっていいから

……」

投げだされたトランクから、赤や白、青の錠剤がのぞいていた。何百錠という数だ。

「カネ」

タケルはいった。スカウトが革のパンツから札入れをひっぱりだして投げた。分厚い札束が入っている。クスリの仕入れ代金だろう。タケルはそこから現金だけを引き抜いた。

ゴキブリ潰しは、タイミングをはかってやれば、けっこうな金になる。それは、次のゴキブリ潰しまでの生活費になる。

「か、か、帰っていいですか」

「まだだ」

タケルはいって、ウエストポーチを開いた。ライターオイルの缶をとりだす。スカウトのしている前で、中身をすべてトランクの中身にふりかけた。

「火をつける」

スカウトに命じた。スカウトの目が広がった。

「あんた、正気かよ。何百万てクスリだぜ。エスもエルも、ジャンプだつて入ってる

」

タケルは無言でスカウトの顔を蹴った。鼻が折れ、歯が飛んだ。

「やめてー、顔はやめてっでいっだのに……。やりませ、やりませからやめで……」

震える手でデュポンのライターをつかみだした。震えが激しく、火をつけられない。

タケルはライターを奪いとった。彫刻入りの金張りだ。魅入られたように見つめているスカウトの前でライターを点した。そしてトランクの中に投げこむ。

炎がたち昇った。スカウトは言葉にならない叫びをたてた。

タケルはころがっているスケボーを拾いあげた。次の瞬間、くるりと一回転して、スカウトの股間を蹴りあげた。渾身の一撃だった。鞆丸が破裂し、激痛にスカウトは昏倒した。

トランクの中の炎は、さまざまなドラッグを溶かし、異様な匂いの煙を吐きだしている。

「気持ちよく飛べや」

失神している二人に吐き捨て、タケルはスケボーに足をのせた。

廊下を滑り、ビルの出入口に向かった。今夜の「取引」をつきとめるのに、タケルはひと月を費やしていた。ひと月かかってゴキブリ二匹というのは、かなり低いポイントだ。

かわりにまとまった現金は手に入ったが、金よりも一匹でも多くのゴキブリを潰すほうがタケルにとっては大切だった。

今まで最高にポイントを稼げたのが、半年前の錦糸町だ。中国人とやくざの混成強盗グループを七人、壊滅させた。もちろん一気に叩き潰したのではない。カモになるふりをして、そいつらの「事務所」に連れこまれ、二人、二人、三人、と順番に仲間を呼ばせて潰したのだ。怪しいマッサージで客を釣り、睡眠薬を吞ませては身ぐるみを剥いでいた奴らだった。

最後の三人のうちのひとりには拳銃をもっていた。そいつは、呼びだしをうけて戻ってきた事務所四人が血まみれで転がっているのを見て、呆然とし、あわててトカレフをひき抜いた。

これまではちらつかせるだけで用が足りてきたのだろう。ろくすっぽかまえないの

を見てとったタケルは、警棒で手首を叩き折った。

出口の手前まできて、タケルはスケボーを爪先ではねあげた。さつとこわきに抱える。ビルの周囲に人影がないかをうかがった。プッシュヤーはときおり、運転手を使っている。運転手は場合によっては「取引」の場までついてきていた。こいつは元関取か何かで、ひどく太った大男だ。運転手を潰すのが一番の手間だとタケルは踏んでいた。そういう点では、今夜は運転手がおらず、ラッキーだった。

ビルの正面に、プッシュヤーのベンツが止まっていた。スモークフィルムでウインドウをべったりおおっている。少し離れた位置に、スカウトのポルシェだ。まだ免許をとれる年でもないのに、女たちに貢がせた金で買ったと、クラブで豪語しているのを聞いた。

人けがないのに安心し、足を踏みだしかけて、タケルは凍りついた。

ベンツの運転席に大男がいた。だが眠っているのか、頭をハンドルにもたせかけ、ぴくりとも動かない。

さらに斜めうしろに人の気配を感じ、はつとふり返る。

紺のスーツを着け、白いシャツにネクタイをしめた男が、無言でタケルを見つめていた。

いつのまに現われたのだろう。

髪を七・三に分け、地味な黒ぶちの眼鏡をかけている。ずんぐりとした体つきで、いか

にもトロそうなおっさんだった。ガキ共がオヤジ狩りの標的にまっ先に選びそうなタイプだ。

だが、ビルの中から外をうかがったときには、その存在にはまるで気づかなかった。

たまたま通りがかっただけなのか。

そうに決まっている。見てくれからして、このオヤジが、プッシュヤーやスカウトの仲間である筈もない。

サラリーマン風の男はのっぺりとした特徴のない顔をタケルに向けていた。表情はまるでない。今こうして向かいあっても、よそを見た瞬間に忘れてしまいそうな、平凡な雰囲気の人だった。それに見えているだけで、話しかけようとか近づいてこよよとする気配はない。

タケルは無視することにした。この男がゴキブリの仲間なら、いつでもひと息で潰せる。くるならいつでもいらっしやい、だ。

スケボーを地面におろし、足をのせた。一気につつ走る。

一〇メートルほど走って、タケルはうしろをふり返った。男はまだそこに馬鹿みたいにつつ立っていた。

ふり返りながらタケルは地面を蹴った。男の口もとが白く光った。笑っていたのだ。白

く光つたのは男の歯だ。

そう気づいたのは、男の姿が見えなくなるくらい遠ざかってからだ。

東品川の倉庫街の外れに、タケルの部屋はあった。再開発からとり残された地区に建っている、元は倉庫だったような軽量鉄骨の建物だ。トイレと流しだけしかなかったが、広さは二十坪近くあるのが気に入ったのだ。簡易シャワーとパイプ式のベッド以外、コンクリートの床はトレーニング器具で埋めつくされていた。キックのジムや空手の道場にいない日は、ひたすらここで体を鍛えているのだ。

入口は細長いシャッターで、それを上下させて出入りする。窓は、五メートル近い高さの天井近くに、明りとりのはめ殺しがあるだけだ。

小さなキイでシャッターを上げ、タケルは中に踏みこんだ。明りのスイッチは少し離れた場所にあるが、暗闇でも迷うことはない。この部屋に移り住んで三年近くになる。

窓からさしこむ光に、並んでいるトレーニングマシンやサンドバッグがぼんやりと見えていた。

スケボーを入口の壁にたてかけようと腰をかがめたときだった。いきなり首すじに激しい衝撃をうけ、タケルはつんのめった。

同時に誰かが明りのスイッチを入れた。床につつぷしたタケルの背中を誰かが思いきり踏みつけ、うっと声が洩れた。

「小僧……」

後頭部に固いものが押しつけられた。

「捜したぜ」

タケルは首をねじった。見覚えのあるチンピラがトカレフの銃口をタケルの右目にあてがった。その向こうに、鉄パイプやサバイバルナイフを手にした男たちが立っている。

「手前のせいで、三人はまだまともに歩けねえ。俺もようやく手首がくっついたところだよ」

チンピラはいつて、タケルの髪を左手でつかみ、頭を床に叩きつけた。

錦糸町のグループだ。どうやってかここをつきとめ、待ち伏せていたのだ。

「今すぐ、お前の頭吹っ飛ばしてやりてえけどな。それじゃ腹のムシがおさまらないんだよ。ズタズタにしてやつからな、覚悟しろよ」

チンピラはタケルの背中をおりと、思いきりわき腹を蹴り上げた。タケルは体をふたつに折った。今夜は両手でかまえている。こいつがいくら素人でも、外さない距離だ。

タケルは腹をおさえ、うずくまった。実際以上にダメージをくらったふりをしながら、

すばやく状況を見てとった。

やばい。絶望的だった。相手は四人しかいないが、うち二人が拳銃をもち、残りの二人も鉄パイプとナイフで武装している。ひきかえこちらは丸腰だ。特殊警棒は、今夜の狩りには必要ないと思つて、ベッドのかたわらに投げだしていた。

「ぶつ殺す前に、いろいろ訊く」

もうひとりの拳銃をもった男がいった。中国人だ。

「誰に頼まれて、うちの店、襲ったか」

「おらあつ」

チンピラがタケルの顔を蹴った。奥歯が折れるのがわかった。

「喋れよ」

「誰にも頼まれてない」

血と歯のカケラを吐きだしてタケルはいった。

「ふざけんな、この野郎！」

次の蹴りを手で払い、立ちあがろうとした。耳をつんざく銃声が部屋の中で轟いた。中国人が壁に向け、トカレフを撃つたのだ。

「お前、いいとこ住んでるよ。ここなら、いくら鉄砲撃つてもダイジョブね。どんなに泣

いても平気」

トカレフをタケルの胸にゆっくりポイントしながら、中国人は笑った。

「このガキ」

チンピラがトカレフの銃身をタケルの額に叩きつけ、タケルは一瞬目の前が暗くなつた。そのまま倒れかけるのを、チンピラはおさえつけた。

「手前、気を失うんじゃないぞ。そんなラクはさせねえからな。血へド吐くまで起きてろ」

それから気づいたように仲間をふりかえつた。

「シャッター降ろしとけ」

ナイフをもった男が動いた。入口のシャッターにとりつくど降ろそうとする。

それから起こったことは、朦朧としたタケルの目には、まるで映画を見ているかのよう

に映った。
ナイフをもっていた男がはね飛ばされた。半分降りかけたシャッターをぐぐつて、紺色の服を着た男が入ってくる。

「何だ、手前は——」

叫んだチンピラの顔を片手でワシづかみにするとぐいとひきよせた。素早く膝がチンピ

ラの鳩尾みぞわちに入り、チンピラの体から力が抜ける。だらりとたれさがったチンピラの手からトカレフを奪いとると、銃を構えた中国人に向け、引き金をひいた。

轟音ごうおんとともに中国人の体はねとんだ。叫び声をあげ、鉄パイプがふりおろされた。それをこともなげに入ってきた男は左腕でうけとめるや、トカレフの銃把じゆうはを鉄パイプの男の顔面に叩きこんだ。

一瞬でケリがついた。四人全員が動けなくなっていた。

タケルは額から流れでる血をぬぐい、目をしばたいた。

紺色の男がふり返った。眼鏡をかけ、白いシャツにネクタイを結んでいる。男は無言でタケルに歩みよると、顎あごをつかみ、ぐいと仰向かせた。

「聞こえるか」

低い声で訊ねた。タケルは目をつぶり、

「ああ」

と答えた。

「目を閉じるんじゃない、こつちを見る」

顔をゆさぶられた。タケルは目を開けた。男の顔を正面から見上げる。まるで特徴のない平凡な顔。

「あんた、さつき渋谷にいたろう」

「覚えているんだな。じゃ、大丈夫だ」

男はタケルの顎から手を離し、背後をふり返った。

ジーツという、モーターの回るような機械音が聞こえた。降りかけたシャッターの向こうでしている。

音の主が姿を現わした。車椅子にのった、痩せこけた男だった。革のジャケットに白いハイネックのセーターを着け、手もとのコントローラーで車椅子を操作している。

頭蓋骨ずがいこつに皮が貼りついただけではないかと思えるほど肉がない。落ちくぼんだ眼窩がんかに異様に鋭い目のはまっている。そこに熱に浮かされているような光があった。

「生きているのか」

その目がすわりこんだタケルを見おろした。

「はい。ダメージは見た目ほどはないようです」

男の薄い唇がゆがんだ。笑ったようだ。

「運がよかったな。待ち伏せが今日で」

タケルは投げだしていた両脚をひきつけた。

「何だ、あんたら」

「まだ戦意を失くしちゃいけないようだな」

それを見て車椅子の男はくつくつと笑った。

「立派なものだ。まあ、若いし、体もそれなりに鍛えているようだから、これくらいじゃへこたれんというわけだ。もつとも、頭のできは相当寒いようだが」

タケルはさつと立ちあがった。わずかにふらつくが、何とかかなりそうだ。

「よせ」

車椅子の男はいった。

「相手をまちがえるな」

「何だ、あんたらって訊いているんだよ」

男は冷ややかにタケルを見つめ、それから車椅子に目を落とした。

「そうだな。私のことは、クチナワ、とでも呼んでもらおうか」

「クチナワ？」

「蛇のことだ。蛇には足がない」

いってから男は再び笑った。タケルは男を見つめた。男のパンツは、膝から下が折り畳まれてる。

「お前のことは知っている」

見つめているタケルにクチナワと名乗った男はいった。そのときナイフの男が意識をとり戻した。中国語で何ごとかをつぶやきながら立とうとする。

スーツの男がさつと歩みよると、うなじを一撃した。そして手錠をつかみだし、うしろ手にはめて床に転がす。

タケルは目をみひらいた。

「あんたら、マッポかよ!？」

クチナワもスーツの男も否定も肯定もしなかった。

「お前は、犯罪者と同じくらい警官を嫌っている。そうだろうか？」

「俺をバクんのか」

クチナワはゆっくり首をふった。

「バクるだけならこんな手間はかけん。十歳のとき、お前は一夜で家族を失った。お前を除く一家が皆殺しにされ、犯人はまだつかまっていない。警察は、犯行の動機すらつかみずにいる」

タケルは黙った。スーツの男が動き、倒れている他の奴らにも手錠をかけていった。いったいいくつ手錠をもっていたのかと思うほどだ。それを見ていて、タケルは気づいた。

この二人は初めから今夜のことを知っていたのだ。タケルの狩りも、こいつらの待ち伏

せも。

すべて承知でタケルが襲われるのを待っていた。

撃たれた中国人の男にも手錠がかけられた。銃弾は右肩を射貫いている。

「警察は無能だ。そう考えたお前は、自ら報復に乗りだすことにした。体を鍛え、格闘技を学び、街で犯罪者を見つけだしては血祭りにあげる。法を無視した野蛮な行為だ。野蛮な上に、ひどく効率が悪い」

「パクらないつつといて説教か」

「誰がパクらんといった？」

クチナワの声が冷たくなった。

「お前はほっておけば、殺されるまで狩りをつづけるだろう。しかもそいつはそう先じゃない」

「パクるんなら早くパクれよ」

タケルは吐きだした。クチナワの車椅子が動いた。タケルを壁ぎわに追いつめるように接近してくる。その機械音は、まるでクチナワ本人までもがモーターで動いているかのようだ。

タケルを追いつめたクチナワは、じっと目をのぞきこんだ。その瞳の色は薄く、中央の

瞳孔どうこうが小さい。本当に蛇のようだ。

「もっと効果のある戦い方をしたいと思わんか。意味があるかどうかはわからん。だが、効果はある。いきあたりばったりに街で見つけた犯罪者を痛めつけるよりは——」

話している間に、スーツの男は手錠をかけた四人をまるで荷物のように抱えあげ、部屋の外に運びだしていた。

「何をさせたいんだよ」

「戦う気があるのか？」

タケルは黙った。こいつらがふつうの警官だとは思えない。第一、たった二人でやってくるなんてありえないことだ。

「考える」

クチナワがいった。そして革のジャケットから紙切れを抜いた。名刺の大きさが、携帯電話の番号以外、何も記されていない。

「明日、電話をしてこい。イエスでも、ノーでもだ。逃げるなよ」

タケルは目を上げた。

「俺は逃げたことなんてないぜ。どんなにやられてもな」

「だろうな。それがお前の愚かさだ」

クチナワは答えた。ジーツという音とともに車椅子が離れた。くるりと向きをかえ、シヤッターをくぐっていく。

ひとりきりになり、タケルは大きく息を吐いた。そして気づいた。背中を追いつめられたときのまま壁にはりついている。しかも、じつとりと冷たい汗に濡れていた。

傷ついた場所は自分で治療した。額の傷は二センチほどあつて骨が見えるほど深かったが、水で冷やして血が止まったところで絆創膏を貼った。

クチナワとあのスーツの男は、本当に警官なのだろうか。治療を終えたタケルはベッドに体を投げだし、息を吐いて天井を見上げた。

タケルが狩りを始めて二年がたっていた。初めはオヤジ狩りをしてきたガキ共を叩きのめしたのがきっかけだった。一度も吐きだすことなくたまりつづけていた体の中の怒りが、一瞬、霧が晴れるように消えるのを、そのとき感じた。それ以来、さらに体を鍛え、街をうろついては獲物を捜すようになった。

そこで学んだのは、本当に警察はアテにならない、という事実だった。

警官は自分たちの方が数が多くて、相手がびびっていると見るや、かきにかかる。一方で、相手が数に勝っていたり、警官とわかつて刃向かってくるくらい気合いが入ってい

ると、見て見ぬふりをしたりする。

結局は幻想なのだ。警官が正義の味方で、多勢に無勢でも悪い奴を叩きのめすというのは、テレビや映画の中のお話に過ぎない。同じ人間である以上、傷ついたり殺されたりすることへの恐怖からは逃れられないのだ。

だからこそ、クチナワとあのスーツの男が警官だとは思えなかった。警察バッジを見せもしなかったし、名前もいわなかった。

ただ、あのスーツの男の強さは異常だった。

あんな奴がいるのか。警官というより、特殊部隊の兵士のような。チンピラから奪い取ったトカレフで中国人の肩を撃ち抜いたときの、流れるような動きは目に焼きついている。

トカゲ、とタケルはあのスーツの男を呼ぶことにした。蛇の連れで、動きが素早いからだ。

クチナワとトカゲは、自分にいったい何をさせようとしているのだろう。クチナワがつ、独特の迫力は、タケルに逆らうことを許さなかった。車椅子から動けない体なのに、壁ぎわに追いつめられたタケルは、まさに蛇ににらまれた蛙だった。只者でない点では、トカゲに勝るとも劣らない。

わかっているのは、奴らがタケルの怒りを利用しようとしているということだ。それを

拒否すれば、少年刑務所に送られる結果になるかもしれない。あの二人が警官でないとしても、これまでタケルがおこなってきた狩りのことを知っているのはまちがいない。

たとえ相手がゴキブリだろうと、傷つけた犯人がわかれば、法の裁きは逃れられない。逃れられるのは、尻尾をつかませない卑怯な奴だけだ。たとえば、両親とミツキを殺した犯人のような。

やるしかない。それがゴキブリを相手にした戦いなら、自分にはやる以外の道はない。タケルは青みがかってきた天窓の向こうに目をやった。

どうせ自分には怒りしかなかった。十八年の人生のうち、半分近くの八年を怒りとともに生きてきた。だったらその怒りを思いきり使ってやる。

刑務所に入れられたら、きっと自分はそこにいるゴキブリ共を、殺されるまで痛めつけるにちがいない。そうして下手をすれば、ゴキブリ以下の人間になる。

ゴキブリを痛めつける奴が、ゴキブリより偉い人間とは限らないのだ。それがタケルにはわかっていった。むしろ人を傷つければ傷つけるほど、落ちていく。

怒りを吐きだすとき、そのことへの恐怖がタケルの中でふくらむ。クチナワは、もしかすると、タケルのその恐怖にも気づいているのではないだろうか。

怒りと恐怖は、タケルにとって、いつも背中合わせにある。

何も無い部屋だった。壁も床もまっ白で、家具も何もおかれていない。まるでできたての病院の建物の中にいるようだ。

翌日、電話したタケルを、クチナワは芝大門に呼びだした。一階にコーヒーショップが入っている他は、何のテナントの看板もかかげられていない小さな雑居ビルの最上階へこい、といったのだ。

そこにはクチナワとトカゲの二人しかいなかった。トカゲはきのうと同じ紺のスーツ姿で、クチナワは喪服のような黒いスーツを着け、膝の上にノートパソコンを載せている。

トカゲが近づこうとするタケルを手で制し、無言でボディチェックをした。

「何もねえよ」

タケルは吐きだした。

「手つづきのようなものだ。この男は、私の指示にしたがう。私の身を守るのが、この男の最優先任務だ」

クチナワは穏やかな口調で告げた。ボディチェックを終えたトカゲは壁ぎわに一步退き、うしろ手を組んでいる。そちらを見やり、タケルはひと言、

「トカゲ」

とだけいった。クチナワの表情がほころんだ。

「なるほど、トカゲか。確かにびつたりだ」

トカゲは無言だった。クチナワは車椅子を回し、タケルに開いたノートパソコンの画面を向けた。

群集と色とりどりの照明が写りこんだ写真だった。広くて暗い場所は、クラブのようだ。

クチナワがアイコンをクリックすると、ひとりの男がアップになった。デニムパンツにノースリーブのボア付Gジャンを着ている。Gジャンの下は素肌で、びつりとタトウが彫りこまれていた。

「知っているか」

タケルは首をふった。Gジャンの男は汗で濡れた胸を光らせ、マイクを手に大きく口を開いている。ニットのキャップをかぶり、キャップには「L」というロゴが入っていた。

「リンという男だ。人気のあるDJで、奴のイベントには、いつも千人からの人間が集まる」

「クラブに興味はねえ」

クチナワは小さく頷き、写真を戻すと別の人物をクリックした。

カーゴパンツに「SECURITY」のTシャツを着た男がアップになった。長身でひ

どく暗い顔をしている。一刻も早くその場をでていきたがっているようだ。この男も腕にびつりとタトウが入っていた。

「こいつはホウ。リンの兄弟分で、彼のイベントには必ず個人セキュリティとしてついでくる。いつてみればリンのボディガードだ」

「中国人か」

二人とも若い。リンは二十四、五。ホウは二十そこそこに見えた。

「中国人であり、日本人でもある。生まれたのは中国だが、小さいうちに日本に連れてこられた。彼らの祖父母が日本人だった。残留孤児という言葉を知っているか」

「聞いたことはある」

「六十年も前の話だ。日本は中国の一部を占領し、多くの日本人がそこで生活をしていた。日本が戦争に負けると、財産を奪われ、土地を追いたてられた。さらにソ連軍の兵士や匪賊と呼ばれる略奪者たちに命までも狙われた。命からがら日本へと逃げ帰る途中で、足手まといになったり、このままでは生きのびるのが難しいと思われた子供や赤ん坊が中国におきざりにされた。その子たちは中国人に育てられ、やがて結婚して子供を生んだ。日本に戻った彼らの親や兄弟は、何十年かすると生き別れになった肉親を捜した。見つけだされた人々の帰国を日本政府もうけいれた。だが帰国した人々すべてが幸福になれたわけ

ではなかった。ことに生まれたときから自分を中国人だと信じこんできた二世、三世にとつて、日本が生きやすい土地かというなら、微妙な問題だろう」

「だったら日本にこなけりゃいいんだ」

タケルはいった。

「彼らの両親や祖父母は日本に帰りがたがった。中国における生活環境が恵まれたものであったなら、中国に残るといふ選択肢もあつたろう。だが日本でもう一度人生をやり直したいと考える人々にとっては、大きなチャンスだ」

「なるほどね」

「問題は、彼らの数が当初日本政府が予測したよりはるかに多く、彼らが期待したほどの援助を、政府や世間が彼らに与えなかった、という点だ。特に小さな子供たちにとつて日本は、とうてい新天地とはいえなかった。言葉も通じない、生活習慣もちがう。異端者に対して、子供の社会はときとして大人の社会以上に厳しいからな」

「いじめにあつたつてことか」

「そういう子もいたろう。中国に戻りたくとも戻れない、そんな環境では日本の社会に対し敵意を抱くようになってもお不思議はない」

「それがこの二人？」

クチナワは頷いた。

「やがて二人は、自分たちに近いメンタリティをもった人間たちを見つける。留学や出稼ぎのため日本にやってきている中国人たちだ。だが彼らからすれば、二人は日本人だ。仲間だと思つて近づくと、利用されたあげく裏切られることもあつた。日本人からは中国人扱いされ、中国人からは日本人だと罵倒される。そんな経験を経て、二人は絆を深め、やがて自分たちのちいさな帝国を築いた」

「立派だね」

クチナワは小さく頷いた。パソコンの画面がかわつた。

「彼らの帝国建設にひと役買ったのがこの男、塚本だ。イベント会社を経営し、オーガナイザーとして、リンのイベントを企画している」

「チェックのスーツを着た、髪の毛の長い男の写真だつた。キザつたらしい二枚目だ。年は三十くらいだろうか。」

「リンがDJをこなすイベントはすべて塚本が企画している。塚本の資金源は、奴が『本社』と呼ぶ組織だ。そして塚本はそのイベント会場で、『本社』が卸したドラッグを売る」

「やくざなのか」

「そうは見えないがな。企業舎弟ともちがう、れっきとした組員だ。『本社』は関西に本部

のある大組織だ」

タケルは、きのう狩ったプッシャーとスカウトの会話を思い出した。千人単位の人間が集まる「リンのイベント」と、スカウトがいつていた。

「俺は何をするんだ」

「この金曜日、リンのイベントが開かれる。場所は、平和島の『ムーン』だ」

まちがいない。金曜のイベント、とプッシャーはいつていた。

「すでに千枚以上のチケットがさばかれ、当日は千人近い客が『ムーン』には集まるだろう。リンの認めたプッシャーだけが『ムーン』で商売をする。だがそこに警官は入れん。警官はひと目で素性を見抜かれる。そうなればプッシャーはひとり残らず消える」

クチナワの目がタケルを凝視していた。冷たい熱がこもっている。

「プッシャーを狩って、塚本とのつながりを暴くんだ。塚本をバクれば、奴のいう『本社』にも捜査をつなぐことができる」

「俺ひとりですか」

「恐いのか？」

「恐かねえ。だがプッシャーの他にセキュリティがいるんだろう。その場で狩ったら、あつという間に潰されちまう」

「セキュリティはいる。『ムーン』のセキュリティは当日、『本社』から派遣されたセキュリティと入れかわる。当然だな。ハコのセキュリティは通常、ドラッグや武器のもちこみを制止するのが仕事だ。だがそれじゃ商売にならん。『本社』からきたセキュリティは、自分らの息のかかっていないプッシャーを弾くのが仕事だ」

「じゃどうしろというんだ」

クチナワはトカゲをふりかえった。トカゲがジャケットのポケットから封筒をとりだし、タケルに手渡した。重さがある。タケルは中身を見た。ジッポのライターだった。

「煙草は吸わない」

「当日は吸うんだ。ライターを開けてみる」

タケルはジッポの蓋をはねあげた。ヤスリをこすると火が点った。

「火を消して中身を抜け」

言葉にしたがった。スポツという感じで、ヤスリと油を染ませる綿のケースが抜けた。ケースは通常の半分しか厚みがなく、残り半分には黒いプラスチックの箱がとりつけられている。小さなつまみがあった。

「そのつまみを押してみろ」

いわれた通りにした。不意にクチナワのパソコンの画面がかわった。東京の地図が表示

され、拡大していく。やがて芝大門のビルの立体画像に変化すると最上階の一面に点滅する輝点が浮かんだ。

「そこに我々が突入する。塚本の現場をおさえる、というわけだ」

タケルは息を吐いた。

「あんたおかしいぜ。こんなスパイ映画みたいな小道具で、本当にプッシャーをパクれると思っているのか」

「プッシャーに興味はない。売人などいくらでもとりかえのきく消耗品だ。私がやりたいのは、塚本だ」

「そいつが『ムーン』にくるとどうしてわかる？ 下端したばに商売させて、自分はどつか安
全な場所にいるかもしれねえだろ」

「塚本は『ムーン』にくる。なぜなら、リンとの関係が危うくなっているからだ。リンがカリスマDJになり、塚本はそのイベントで荒稼ぎしてきた。だがリンはそろそろ塚本とは手を切りたいと考えている。いったように、塚本は日本人だが、リンは日本人じゃない。互いに利用しあってきた仲だ。リンを信用できないと考えた塚本は、ここでする大きなビジネスを失敗させないように、自ら監視監督しにくる筈だ」

タケルはクチナワを指さした。

「ずいぶん詳しいな。そこまで知ってるのなら、俺を使う必要もないのじゃないか」

クチナワはすぐには答えなかった。タケルを見つめ、訊ねた。

「やるのか、やらないのか」

「俺が殺されたらどうなる？」

「どうもならん。クラブイベントにケンカはつきものだ。頭に血が昇ったガキが暴れて刺された、そんなところだろう」

「俺が関係ないところで、このライターのスイッチを入れたら？ マッポが駆けこんできたら、このライターでどつかの馬鹿がクサを炙あぶってるだけかもしれない」

クチナワは首をふった。

「当日の情報是他からも入ってくる。お前が私を裏切ればすぐにわかる」

「他？ 他って何だ。マッポがいるなら、そいつにやらせるよ」

クチナワは首をふった。

「いったらう。『ムーン』に警官は入れない。金曜日そこにおいて私に情報を流してくるのは警官ではない。だがその人物ひとりの力では、塚本をパクるのは難しい」

「誰だい、そりゃ。『ムーン』の従業員か」

「危険なのは、お前と同等かそれ以上だ。正体を教えることはできない」

「俺がまちがってそいつをぶちのめしてもいいんだな」

「大丈夫だ。そうはならん。相手はお前のことを知っている」

「不公平じゃないか。向こうは俺を知ってる。じゃ向こうが俺を裏切ったらどうすんだ」

「裏切りはない」

冷やかにクチナワはいった。

「冗談じゃねえぞ。そこにいるのがたとえマップポだつて信用できるかどうか怪しいのに、そいつが俺をチクらないって、どう証明できるんだよ」

「その人物は塚本に深い恨みを抱いている。塚本をツブすのが目的だ」

タケルはクチナワを見つめた。

「もし塚本が自ら手を下してお前を殺すというのなら、話は別だろう。塚本の殺しの現場をおさえられたら、まちががなく奴は終わる。そうなれば、その人物もお前を見殺しにするかもしれない」

「ふざけやがって。俺は捨て駒かい」

「場合によっては。だが刑務所に送られるよりはマシだ。ちがうか」

タケルは鼻を鳴らした。

「チャカくれよ。自分の身は自分で守る」

「できんな。第一、拳銃を都合したところで、本社 の人間以外の武装は、すべてセキュリティがとりあげる。いったらう、当日『ムーン』のセキュリティは、すべて塚本の息のかかった者がつとめる」

タケルは天を仰いだ。

「やるのかやらないのか」

クチナワの声が厳しくなった。

「やったら俺はム所送りにならない、そういうことか」

「それだけじゃない。この二年以上に効果のある狩りをしたことになる。塚本の卸すドラッグは、末端で年間に三億円を上回る。お前が今まで潰したブッシャー全員のアガリをあわせてところでその十分の一にも満たん」

「俺は何もブッシャーだけを潰してきたわけじゃねえ」

「私もドラッグディーラーだけを狙っているわけじゃない。塚本にはその先がある」

「——わかった」

タケルは吐きだした。

「やるぜ。そいつらを潰してやる」

クチナワは小さく頷いた。

「お前は今日から私のチームのメンバーだ。なった以上、任務が終わるまでは一切、指示に逆らうことは許さない」

「ふざけんな、何がチームだ。俺はマッポじゃない」

「だれが警官にしてやるといった。お前にはバツジも手錠もない。たとえ今夜パくられたって、誰も助けにないかん。私の指示にしたがえというのは、現場で指揮系統に混乱がおきれば、命の危険にさらされる者ができかねないからだ」

「もうひとりの奴のことをいつているのか」

「そうだ。その人物も、私の指示にはしたがうことになっている。互いの安全のためだ」
確かにそれは理屈かもしれないなかった。「ムーン」のイベントに潜りこんだら、そこはすべてが敵だ。お互いをのぞいては。しかも自分とそいつをつなぐのはクチナワひとりなのだ。その指示に逆らえば、計画はムチャクチャになってしまう。

タケルは無言で頷いた。

「摘発がうまくいけば、お前もその人物が誰かわかるだろう」

クチナワは厳しい口調のままいった。

「別に興味はねえ。ただ訊きたいことがある」

「何だ？」

「俺とそいつ以外に、当日『ムーン』に入る、こちら側はいるのか。こちら側というのはつまり——」

「チームか？」

タケルはしかたなく頷いた。

「いない」

クチナワは即座に答えた。

「現段階で金曜のことを知っているのはこの三人と、その人物の四人だけだ。つまり、カルテットというわけだ」

「ならいい。まちがって俺がそいつをぶちのめす確率は、千何百分の一だろうから」

クチナワの頬に笑みが浮かんだ。クチナワはジャケットのポケットから紙切れをだした。

金曜日のイベントのチケットだった。